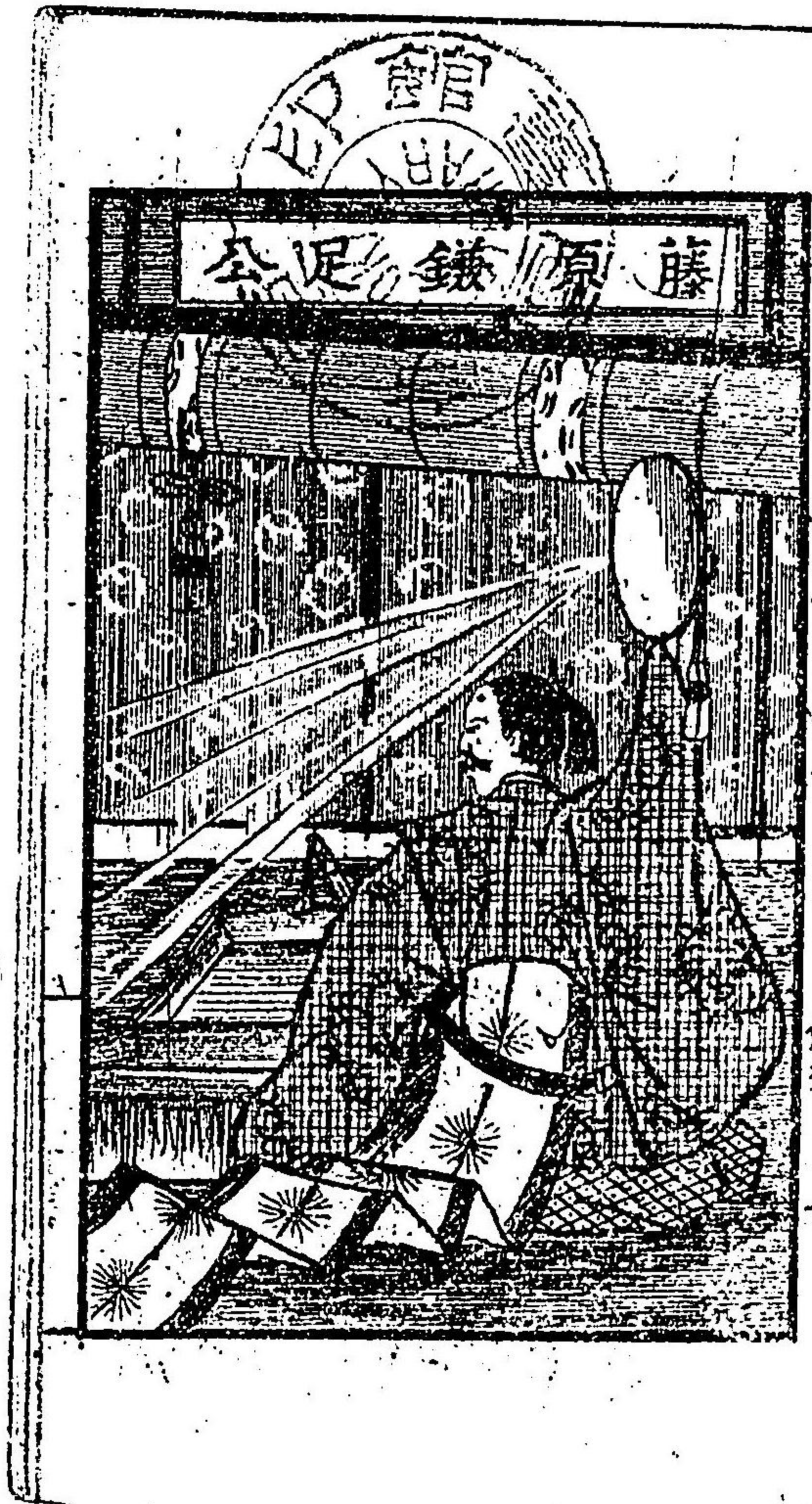




30

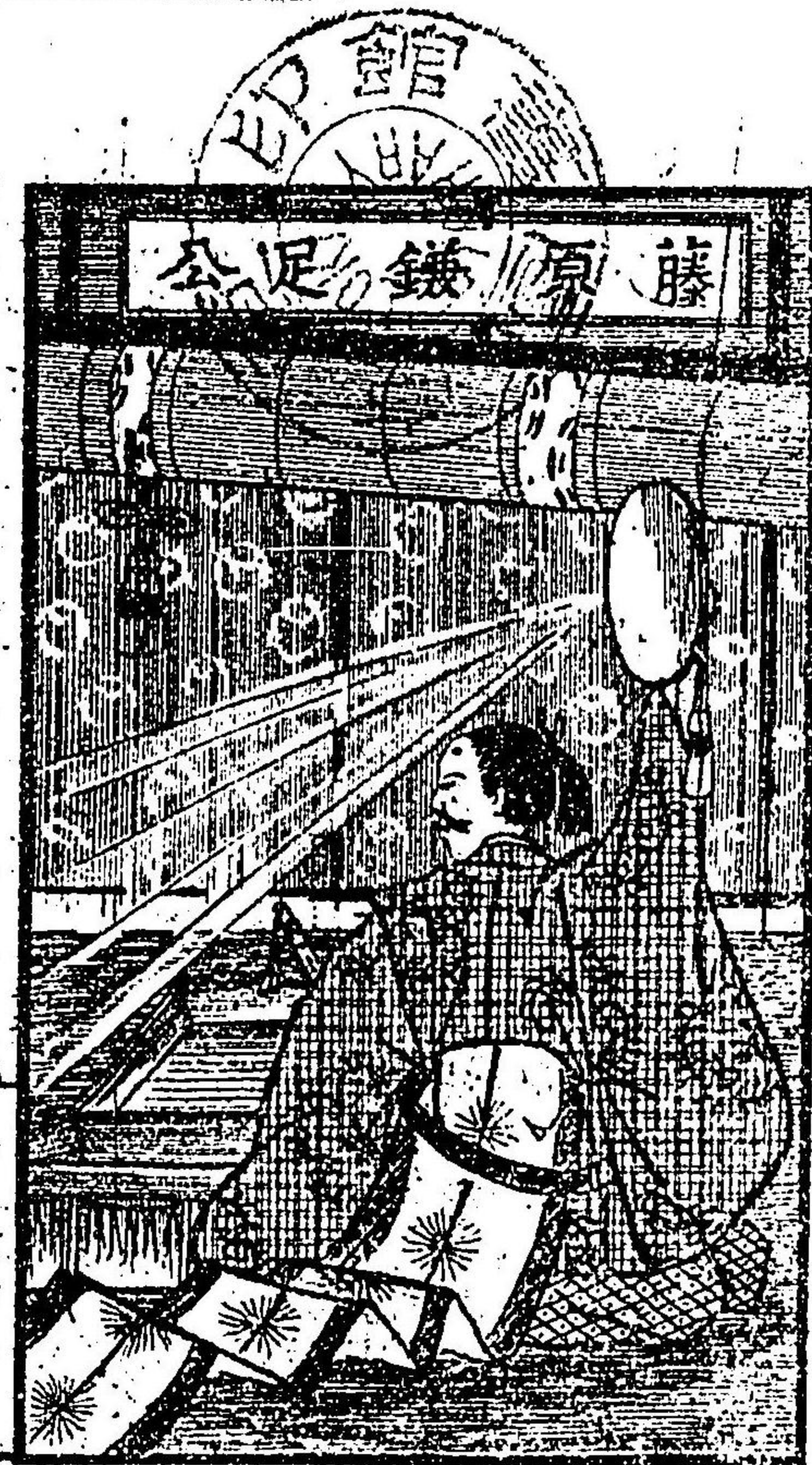
552

中國書



No 9066





No 9066







三十九代天皇の時、當りて曾
 我をさぐりて反謀ありきとあれど
 安部中納言行主を始めとし
 大判事清澄等もこれにつゆ
 り切腹を志すべく、一子入鹿大
 臣行主を打つて大判事を味方
 として父が反謀を受けざる



益々狼師は六
 作れ三作もつれ
 何卒いって白き女
 麻とやらんとて
 三笠山ゆるひハ



ついで山の谷間
 ういひふまはく
 白き女麻を打つ
 り親子共々大音
 びいさんて住来
 へ立ちへりるる
 麻ころどの
 せんぎひし
 く父のうかり
 作三作が名
 のつていつる



芝六餅
 足公
 うぐさ
 弟の子
 杉松と
 さし殺



けつぞくを立る
 折しも鎌足公
 三作の命ごひし
 てかへせし鎌足
 公ハ鏡をさづさ
 へ入きこれハ帝の
 きんめいちまた
 開けし故芝六の
 忠臣頭元
 の奴上六郎と
 ありまけり



初も入麻大臣天下
を奪ひ大幸の館へ大
判事を呼よせ采女
の歌を両家へ匿ひ
置るるよ透ひかし
依て兩人を差上よ
との難頭を云ひ櫻
の枝を渡りけり



夫の心疾身の行末を念ひ
 つつくとして居る処は大判
 事ハ我子の庵に至り入鹿を
 んごい云ひさうしてゐる

頃で弥生の始
 つう太宰の
 娘ひさどり
 病氣と云立
 出養生も
 川向ひ久我
 之助は戀
 こがれて
 境の川
 小へ



多かりよ切腹させて
忠義と立させたる此方
の亭主八定高娘を
入鹿より入内
させよ
云へ娘
の心を
りて首
標を止

獵師ふらそ八入鹿の
館ふち通り鎌足公
またのおれこそ使るり
と口上を述よる入鹿
うたがうて悪口を
いさくへんとして
いひこめける



おとこハ求馬の御
 とつて御殿へ入り
 くるを女中うちあ
 ちふりまうて奥へ
 いるをわとこまは入
 りんするをふうと
 一刀を殺して血一木
 とせ六が折さる鹿の
 血を笛ふそくぎて
 入鹿を亡おす





入鹿大臣



忠臣鐵足公

明治二年三月廿日御届

京都府下京区第十三區本町三番
著者兼発行者 今井七太郎

明治二年三月十日印刷成功

京都府下京区第七區松原町
北二番
印刷者 伊藤伊之介

賣捌所

京都寺町松原北
今井七郎兵衛

